

目 次

項 目	頁
能とは	3
能楽の歴史	7
能の主な作者	11
能の典拠となった主な作品	13
世阿弥の花伝書『風姿花伝』	13
狂言の歴史	15
国立能楽堂	16
能舞台	18
番組表	20
演能の今昔	21
演目の系列	21
演目の分類（夢幻能と現在能）	22
能の構造、構成	22
狂言の演出と特徴	23
狂言の分類	24
能の音楽的構造	25
能装束	29
狂言の装束	32
能面	33
狂言面	35
作り物と小道具	36
外国人に人気のある 4 演目のあらすじ 「土蜘蛛」「羽衣」「船弁慶」「道成寺」	37

ターンがあり（大鼓—約 200 種、小鼓—170 種、太鼓—約 100 種）、笛にも音を言葉に置き換えたメロディーパターン“唱歌”がある。

また、鼓や太鼓の胴の部分は、革や紐や演者の手で隠れてしまい観客にはよく見えないが、そこには絢爛豪華な蒔絵が施されている。

能装束

能装束は大別すると種類や用途によって、着付類・上着類・袴類・仮髪・冠り物・その他の6つに分類される。当初、装束は室町時代（14～16 世紀）の武家などの日常着に近い質素なものだったが、やがて能の保護者であるパトロンたちが金襴や緞子の立派な衣服を褒美として与え、それが舞台上で使用されるようになった。

舞台装束として確立するのは、刺繍や染色の技術が発達した安土桃山時代（16 世紀）以降で、江戸時代（17 世紀）に能が武家の式楽になると、幕府は諸大名の勢力をそぐ目的でお抱えの能役者のためにこぞって贅沢な装束を誂えさせ、結果的に能装束は絢爛豪華になった。この時代に能装束の様式が完成され、扮装パターンも決まった。

能装束に用いられている布の素材は、どれも硬く、厚く、それを着付けた姿は直線的で、どっしりと静的になる。つまり、歌舞伎のような曲線的、動的な美と対極にあるのが能装束だ。能装束は能面の種類（200 以上）に比べ、驚くほど少ないが（約 30 種）、着装方を変えることによって曲目や役者の意図が最大限生かされ、能の華やかさが演出される。

演目によって着付け方法はさまざまだが、見所から観る能装束姿の演者はどこから観ても見事としか表現しようがない。しかし、装束の下はと言うと、汗が装束にしみこまないよう、綿入りの胴着と股引をを着用し、2～3 枚の下着の裾は演者が動きやすいよう腰まで端折り、帯や糸でぐるぐる巻きになっている。その重

の際、桶が動かないように後見が後ろで抑えている。狂言でも、葛桶はもっとも重要なアイテムで、桶は酒樽に、蓋は酒を飲む大盃に見立てるなど、さまざまな曲に使用される。

これら「作り物」や「小道具」は、いずれも、何十種類ものパターンがあり、それぞれ極限まで簡約され、最大限の効果を狙っている。

外国人に人気のある 4 演目のあらすじ

「土蜘蛛」（作者不明）

鬼退治で知られる源頼光伝説をもとにした曲だが、シテは土蜘蛛で、演目の焦点は頼光を襲った土蜘蛛と武者たちとの熾烈な戦いに当てられている。

真夜中、重い病で臥せる頼光の枕元に見知らぬ法師が現れ、祈祷と称して古詩を詠じ始める...よくよく見ると、それは蜘蛛の化物で、千筋の糸で頼光をがんじがらめにしようとする。頼光は家に代々伝わる名刀で切りつけるが、傷を負った法師はたちまち姿を消してしまう。頼光に化け物成敗を命じられた武者たちが蜘蛛から滴り落ちた血をたどって山奥深く入ると、怪しげな古塚が目に留まる。それを突き崩すと、中から土蜘蛛の精が現れ、武者と死闘を繰り広げる。

この曲の見どころは、後シテの土蜘蛛が和紙で作られた紙テープの蜘蛛の糸をふんだんにまき散らしながら展開する武者たちとの立ち回りと勇壮な舞である。能舞台では珍しいエンターテインメント性の強い作品で、歌舞伎でもよく演じられている。

「羽衣」（世阿弥の作とされているが、不明）

春の朝、三保の松原に漁に出掛けた白龍はくりょうは、松の枝にかかっていた美しい衣を見つける。家宝にしようと思ち帰ろうとしたところ、目の前に麗しい女が現れ、「それは天女の羽衣で、それがないと私は天に帰れない」と嘆く。その悲し